

情報交流拠点としての機能を備えた市民開放型浄水場の建設

阪神水道企業団 花元隆司（正会員）、中安眞司

1. はじめに

近年、水道は市民生活や都市活動に必要なライフラインとして極めて重要な社会的使命を有している。また、健康意識の高まりや生活スタイルの変化から、水道水の安全性や品質に対する市民の関心は高く、化学物質や感染性微生物への対応に併せて質的向上も求められている。一方、「21世紀は水の世紀」と言われており、地球温暖化に起因する水資源の不足や深刻な環境汚染を考慮すると、水循環の中で水道の果たすべき役割は大きくなってきている。

神戸市および阪神間の尼崎市、西宮市、芦屋市の240万市民の水需要の80%を賄う阪神水道企業団（用水供給事業者）では、新しく建設した尼崎浄水場（日量373,000m³）の整備において、「これからの浄水場のあり方について」の懇談会を開催し、受水事業者および関係機関（厚生省、兵庫県）と意見交換を行った結果、市民に開かれた浄水場として、市民と水道の接点となりうる施設整備を行い、水に関する情報を積極的に発信していくこととした。以下、施設整備の考え方と整備内容について紹介する。

2. 施設整備の考え方

尼崎浄水場は阪神淡路大震災の復興という位置づけとして実施したものである。高度浄水処理の導入と最新の水処理技術の適用による水質管理の強化、震災経験を踏まえた施設耐震化、ゼロエミッションによる環境保護対策や市民に開かれた社会基盤整備等、非常に高い付加価値を有する浄水場への全面更新であり、特に、市民開放を意識した施設整備を行っている。

これまで企業団では、高度浄水施設の導入に伴い、高度処理水パック詰やパンフレットを作成し、イベントや浄水場見学者に直接配付し、高度浄水処理の必要性について理解を求めてきた。このうち、浄水場見学については小学生や一般市民を中心に年間一千人以上の見学者を受け入れており、小学生に対してはキャラクターを使用したコンピュータグラフィック（CG）を用いたビデオ（水の戦士ピュアリン）を作成し、水処理の仕組みについて説明している。（図1参照）

しかし、用水供給事業という特殊性もあり、直接市民と接する機会も少ないことから、施設については「あることは知っているがどこにあるのかわからない」という場合が多く、あまり認知されていないのが現状である。また、水道施設としての安全性を確保する必要性から関係者以外の立ち入りを制限していることもあり、浄水場の地味なイメージが定着している。

そこで、尼崎市の中心部に位置し、幹線道路に面しているという良好な立地条件にある本浄水場を市民に開かれた浄水場とすることで、市民に印象づけ、「蛇口の水はどこからきているのか」など、水道の果たして

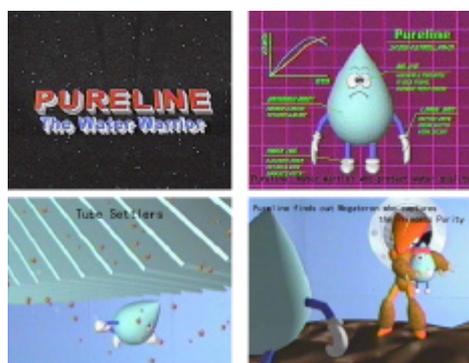


図1 CGアニメーションビデオ



図2 施設整備のイメージ

キーワード 浄水場、環境意識、防災拠点、水循環

連絡先 神戸市東灘区西岡本3丁目20番1号 Tel 078-431-2379 Fax 078-431-2746

いる役割や水道水の安全性、さらには、グローバルな水の循環をアピールすることによって、水質保全の重要性を訴え、水資源に対する理解を深めてもらうこととした。

3. 整備内容

施設整備の中心は防災意識の向上を目的とした防災拠点としての施設、環境意識の向上を目的とした見学者施設である。しかし、PR効果を考えた場合、浄水場の認知度を高め、来場者を増やすことが課題となる。

この課題を解決する方法(図2参照)として、まず、周辺道路からも浄水場を印象づけることで認知度を高めていくこととし、建築物のデザインに配慮するとともに、敷地境界部分をセットバックし、正門付近にも緩衝ゾーンを設けた緑化整備を行った。特に、交差点のあるコーナ部はシンボルツリーの植栽とライトアップにより、街のランドマークを目指している。また、水道水を貯留しておく浄水池付近の上部空間(約13,000m²)については幅広い世代の人々が楽しめるガーデニングを中心としたホームセンターを事業コンペ方式により誘致することで集客し、イベントの開催などで浄水場と連携することにより、家族連れやカップルが気軽に浄水場を訪れることができる環境を整備し、来場者数の増加を図っていく予定である。

メイン施設である防災拠点については阪神・淡路大震災の経験をもとに緊急時給水拠点として、給水車および個人への浄水供給が可能となる応急給水施設を設置した。また、オープンスペースは災害時に避難場所として活用できるものである。

見学者施設については150人程度が収容可能なホールと市民の関心が高い高度浄水施設が接する範囲(ビッグパイプスクエア)を公開し、施設の外側から凝集沈澱、オゾン、活性炭処理の状況を観察できる施設や浄水技術・環境技術をPRする展示室を整備した。(写真1参照)また、情報発信として、インターネットにより浄水場の運転状況や水に関する情報を発信することが可能なハードの整備も行っている。

なお、浄水場全体を業務専用ゾーン、見学者ゾーン、有効活用ゾーンにゾーニングすることで浄水場として確保すべき衛生面並びに危機管理について、安全性を確保している。(図3参照)

4. おわりに

これまで浄水施設は水質管理の観点から一般市民に対して開放することは少なかった。しかし、尼崎浄水場では出来るだけ多くの市民に来ていただき、水道の仕組みや役割、水の循環をわかりやすく説明することで水の重要性をアピールしていくこととした。

平成13年4月に浄水場が稼働し、平成14年度に商業施設の営業開始を計画している。このため、稼働当初は従来の団体での見学者を受け入れていくことになるが、商業施設の開業に向けて事業者と協議を行い、来客者を浄水場に誘導するための工夫について検討していく予定である。

事業者からの情報提供はともすれば一方通行になってしまう恐れがある。従って、市民の意識や関心を把握しながら双方向の関係を築いていくための情報交流拠点としての役割を目指していくつもりである。



写真1 ビッグパイプスクエア

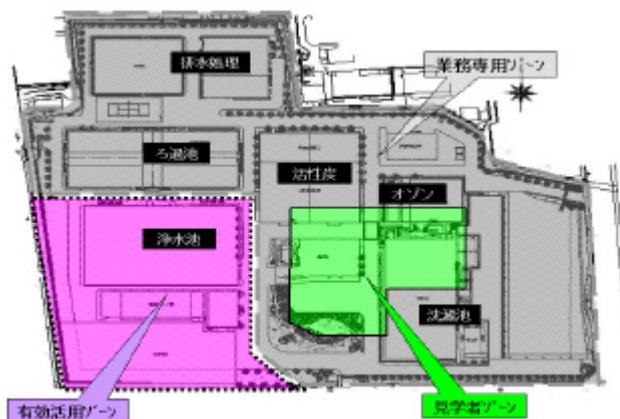


図3 浄水場のゾーニング